

随想

無人攻撃飛行機とデザイナーベビー

最低限の矜持を捨て去った人類

加藤 宏光

「銀河鉄道999」というアニメをご存知だろうか？ 松本零士氏による長編漫画をアニメ化したものである。

三四〇三五年も前に上映された。映画館の大きなスクリーンに映し出された冒頭の幻想的なシーンは、今でも鮮烈な記憶として残っている。物語のテーマは、宇宙全体の生命体と機械人間の戦いであり、機械は生命体を無駄な存在という規定の下に排除しようとしている。

松本零士氏は第二次大戦末期に特攻隊員として死を決意した、と聞いている。それゆえに生命が究極の価値あるもの、という概念がベースの作品が多い。

この物語では生物、とくに人間が主人公であるために、機械

化人間を敵としてこれと戦い、相手を完全に滅ぼすことでエンド（ハッピーとはいえないかもしれない）となっている。

人間であるからアニメのストーリーを受け入れるものの、人が人を主人公とするのはある意味利己的な設定ともいえる。生物、無生物を同列に置いた場合、どちらが正義と一概にはいえない。

二〇〇一年の九月十一日にニューヨークの世界貿易センタービルをハイジャック旅客機で自爆攻撃したアルカイダによる無差別テロ事件（いわゆる九・一一事件）に端を発したアフガニスタン戦争、あるいはブッシュが九・一一事件から大量破壊兵器疑惑を口実にした全面的な戦争に発展させたイラク戦争で目

を引いたのは、米国の使用した無人攻撃機であった。

二〇一三年十月十九日の朝日新聞（一面、二面）に無人機が大きく取り上げられていた。無人機の使用はさまざまな社会反応を招いている。米国にいて戦場の人をターゲットとして無人機で殺害することから、心的外傷ストレス障害（PTSD）に陥る兵士が少なくない、という報道もあった。

この無人機は、米国人の安全を確保できるものの、ターゲット以外の非戦闘員、民間人を誤爆するケースが多く、問題視されている。しかし、無人機の問題として焦点が当てられているのは、もっぱら巻き添えになる民間人の問題であり、機械が人

を殺すという無機質な戦争実態ではない。

このトピックに対して著者が感じるのは、機械が即人間の敵になっている構図であり、そこから来る違和感である。戦いの歴史を思えば、蒙古軍襲来の時、戦う者同士がそれぞれ名乗りを挙げ、時には得物まで揃えて正々堂々と力量を争うという、古来のスタイルで戦いを挑んだ武士に対して、名乗りを挙げている間に飛び道具で狙い撃ちにする蒙古軍の戦い方に名のある武将が命を落とした一二七五年の文永の役や、その後の種子島への鉄砲伝来で、足軽を中心とする戦い姿を変えた戦国時代等、時代を変えたのは進化した武器をいかに使いこなすか、という

現実であった。

また翌日の同新聞には、遺伝し解析で好みの赤ちゃんを得る《デザイナーベビー》の特許が米国で認められた、ということが取り上げられていた。

デザイナーベビーとは、受精の段階で遺伝子等を操作して、外見・知力・体力等、親の希望をかなえた形で生まれる赤ちゃんのことである。卵子と精子を体外で受精させる体外受精が一九七八年に可能になったことで現実味を帯びた。

日本でも、特定の病気を持つていないかについて受精卵の遺伝子を調べる着床前診断はすでに行われている。さらに遺伝子解析が進めば、『赤ちゃんのデザイン』も可能になると考えられている。ただ、生命を商品のように扱う考え方には、倫理的な批判が強い(朝日新聞一面脚注より)。

先に紹介した「銀河鉄道999」では、機械化人間が宇宙に生存するすべての生物を不要の存在として抹殺しようとする、

というテーマであり、後者は人間が自分の好みに人間(自分の子供ということになるのだろうか)をデザインしよう、というものである。

また無人機は、現時点では人間が遠隔操縦するというものの、機械が特定の人にとって不要の人間を含む、生物全体を抹殺しようとする。

これら三つのトピックスには独特の共通性があるように思われてならない。

同族の生物を殺害するのはチンパンジーを含めたヒトだけだという(類人猿IIゴリラ、チンパンジー、オランウータンは猿とよりヒトの亜種に分類すべきというほど、遺伝的にヒトに近いらしい)。

猛獣といわれる動物たちはオスがテリトリーを確保するために同族を攻撃するが、死に到らしめることを目的とした戦いはしない。また群れでの順位や縄張りを争う動物たちは多く、争いの結果として片方が死亡することはあるが、殺すことを目的

としていない点で、ヒトの争いとは趣を異にしている。

有史以来、さまざまな戦いを経てきた人類の良心の矜持として、正々堂々と戦うという姿勢は《自分の生命》と《戦う相手の生命》を同格の危険にさらす、ということまで維持されていた。そう思う。

第二次大戦で、非戦闘員を無差別に殺害することを経験して(戦勝側と敗戦側でその取り扱いは雲泥の差があることはここでは取り上げない)、人類は最低限の矜持をも捨て去ってしまった。相手を殺すに自分は危険を冒さない。こうした行為を、どんどん進化し思考能力を得た人工知能は、不要のモノと判断しないと言えるのだろうか？

現在、木村拓哉と柴咲コウ主演で放映中の「安堂ロイド」というテレビドラマがある。主人公はアンドロイドで、二一三年から現在に転送されてきたという設定である。人工知能が人間を不要と断定し、アンドロイドならではの殺傷力で消滅させ

る。二〇六六年に戦闘型アンドロイドたちが全世界で一〇億人を虐殺し、しかもそれは先進国の指導者が開発途上国の増えすぎた人口の減殺を目的にプログラムさせ行った行為で、木村拓哉扮するアンドロイドは非人道的な計画を主導した指導者を殺したらしい。そして二一三年から派遣された敵方らしきアンドロイドたちは、利己的な生物人間を嫌悪し殺そうとする。

物語は人間が主人公だから「悪人ばかりでないでしょう！人のために尽くす人もいるし、誰にも人としての善・救いはあるのです」という展開で、ハッピーエンドへ向かっているのだと思う。しかし主人公がアンドロイドなら(あるいは人類によって絶滅に向かわされている動物でも)、人間が人間のためしている行為とそれに起因する現象をよしとしないかもしれない。無機質な記事を読んで、またドラマを見て、自分の利益しかない現在の経済機構と通じる、とふと感じる危機感ではある。